

会議録

令和4年度 第1回総合教育会議

- 1 日 時 令和4年7月27日（水曜日）
午後2時45分～午後4時30分
- 2 場 所 中央図書館2階 視聴覚ホール
- 3 出席者 市長 星野 光弘
教育長 山口 武士
委員 小野寺 巧
委員 深井 美千代
委員 横田 豊三郎
委員 深野 はるみ
- 4 署名委員 委員 小野寺 巧
委員 横田 豊三郎
- 5 説明職員 教育部長事務代理 磯谷 雅之
学校統括監 小林 正剛
学校教育課長 石井 勝博
- 6 事務局職員 政策財務部長 水口 知詩
政策企画課長 齊藤 博之
政策企画課副課長 甲佐 隆志
政策企画課主事 須堯 陸海
- 7 傍聴者 0人
- 8 議 事 いのちの教育に関する取組について

【星野市長】

皆様こんにちは。本日は暑い中、教育委員の先生方には先立って教育委員会会議並びにつるせ台小学校の芝生のご視察をいただいたということで、お疲れ様です。

本日でございますが、「いのちの授業」ということで、私どもが長くお世話になり、また、効果のある事業のご展開をいただいております、中先生、そして共同でご研究されております、渡邊先生と戸津先生にお越しいただきまして、令和4年度第1回総合教育会議の題材とさせていただきます。

これに先立つ3年ほど前にも、2校の中学校で調査を行っていただきました。

「いのちの授業」を通して調査をしていただいた中で、対象となった中学生の自尊感情並びに認知的ソーシャルキャピタル等、高いものがあるということをご指導いただきました。

さらに、今回の研究報告ということで、中学3年生につきましては6校、並びに1年生2年生も含めまして対象を広く大きくさせていただいた中で、この研究発表を過日、私並びに山口教育長とで報告を頂戴し、前回のものと同様な結果でございました。

我々としては、効果的に子どもたちの成長に関与してきているということをお示しいただいたと考えておりますので、ぜひこの研究を、教育委員の皆様と共有させていただきたいと思った次第でございます。

したがいまして、本日はこの後、3先生から報告いただいて、勉強させていただき、地域の子どもたちがしっかりと自分を持ちながらも、他者への理解など、社会の中ですくすく元気に育っていくということにつなげてまいりたいと考えております。本日は特に勉強させていただくということで、関係者の皆様にもお揃いをいただいて、有意義な時間にさせていただきたいと考えています。

次に、本日は新たに教育委員に着任されました深野委員が初めての出席でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後に、新型コロナウイルス感染症の話をして締めたいと思います。

ご存知のとおりBA5への置き換わりということで、これまでの第6波のピークが、本年の2月に2,600名の方、また7月に入りまして昨日までで2,600名ということで、この後の7月の数日を考えますと、第6波を超える勢いということでございます。

これまで小康状態で、感染者数は10名、20名を重ねてございましたが、その後増加しまして、1日で225名という数字を先週の金曜日に記録をしているという状況であり、ぶり返しというふうに考えております。

私どもの注意並びに感染防止対策へのお願いというものは、緩むことがないと思っておりますし、先日もビデオを通じて市民の皆様に注意喚起をお願いしたところでもあります。

また、ワクチンでございますが、現在3回目の接種と4回目の接種が並行して動いてございます。3回目につきましては、今中心的に陽性になっている10代20代30代の方の接種率が低いという状況でございますが、全体では68%まで届いております。さらに4回目の接種が始まったばかりでございますけれども、高齢者の方を中心に5ヶ月経った方から順次接種していただいております。

先ほど申し上げたビデオの中での私のメッセージとしても、10代20代30代の皆様には積極的にワクチンを接種していただきたいとお願いをさせていただきました。

すでに、様々な病院で通常の患者さんや、手術を受ける患者さんが、診察や手術が受けられないという状況になりつつあります。医療の逼迫を起こさないためにも、自分の身体を守るためにも必要なワクチンだと理解しておりますので、こうしたPRを積極的に行っているところでございます。

どうぞ先生方にもご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

それでは本日の総合教育会議を始めさせていただきたいと思っております。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

【齊藤政策企画課長】

星野市長ありがとうございました。

続きまして、本年4月から新たに教育委員として深野はるみ委員が任命されました。ここで深野委員から一言ご挨拶を頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。

【深野委員】

保護者目線だけにならないよう、なるべく広い視野で見たいと思って勉強していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【齊藤政策企画課長】

深野委員ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

また、ここで、本日の議題の講師であります先生方のご紹介をさせていただきます。

本日は講師として、本市学校における「いのちの授業」にご尽力をいただいております、

帝京大学 助教 中 理恵 先生、

また、本市中学校において、共同研究を実施いただいております、

国立看護大学校准教授 渡邊 香 先生、

国立看護大学校助教 戸津 有美子 先生、

を、ご紹介させていただきます。

(講師略歴説明)

先生方、本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、以降の進行につきましては、星野市長にお願いさせていただきます。

星野市長、よろしくお願いいたします。

【星野市長】

議事に入る前に本日の会議録署名委員を指名いたします。会議録署名委員には、小野寺委員並びに横田委員を指名いたしますので、よろしくお願い申し上げます。

本日の議事は、「いのちの教育に関する取り組みについて」でございます。

冒頭の御挨拶の中でも触れさせていただきましたが、本市中学校で実施をしている「いのちの授業」の概要と、本市中学生を対象といたしました共同研究の成果についてご講演をいただきます。

それでは中先生、渡邊先生そして戸津先生、どうぞよろしくお願いいたします。

【中先生・戸津先生】

(「いのちの授業」の概要の説明)

【渡邊先生・戸津先生】

(共同研究に関する説明)

【星野市長】

ありがとうございました。中先生には「いのちの授業」の目標・目的、そしてこれまでのお取り組みの内容について説明いただき、本当にありがとうございます。

また、渡邊先生と戸津先生には、ご評価をいただいた中で、結果については大変、予期せぬ高評価というふうに思うところがあります。行政として、特にソーシャルキャピタルにつきましては、地域を挙げて地域作りをしよう、子どもたちも主役であると考えており、昨今では、子どもたちへの虐待やネグレクトなど、ご家庭では大変厳しい状況にあるお子さんもいらっしゃるのを把握をしておりますし、地域を挙げて子ども食堂などの運動も大変活発に本市で行われているところです。

それから、1ヶ月ぐらい前に交通安全に関する総会がございました。

この時に、東入間警察署長もお見えになる会議でございましたので、スピーチの中で、富士見市の子どもたちは交通ルールを守っています、遵守しています、ということ挨拶の中で触れさせていただきました。

本市では、子どもたちがいつもルールを守って、横断歩道では自転車を降りて渡る風景をあちこちで見かけます。

本日お示しをいただいた中で、普段の生活で子どもたちの行動を見ますと、こう納得のいくところを、私としても腑に落ちる部分がたくさんございました。

我々は、そういう意味では地域を挙げて地域を良くするという事は、子どもたちの環境を良くすることだ、というふうにも考えております。

「みんな笑顔☆ふじみ」が、新しい我々の20年間の方針の合言葉でありますので、まさに我が意を得た内容、結果だったと考えているところであります。

そして、最後に戸津先生より今後の課題ということで整理をいただきました。

これにつきましても、山口教育長とは、いのちを大切にすることというのは、教育大綱の大目標でもありますので、こうした、いのちに関わる事業等につきましては、しっかり取り組んで行く必要があるものと考えております。

従って最後にお示しをいただきました、こうした調査の継続などは、私は必要なものと判断しているところです。

どうぞ委員の皆様方から、ご質問ご意見を頂戴し、議論を深め、それぞれの先生方の経験やこれまでのお考えの中から、違う角度からも焦点を当てていただきますと幸いですので、どうぞご発言をいただきたいと思います。

【横田委員】

私は他市で教鞭を取っていたため、地元の富士見市の状況はなかなか見えないうところがあったのですが、データで表していただき、富士見市に住んでいる子どもたちの立ち位置がよくわかりました。

私も長い経験の中で、助産師の方が「いのちの授業」を行っているのは、初めてお聞きしました。助産師の方が出産と直接触れ合っていることについては、男子の生徒にはなかなかピンとこない。女子には、逆に違和感に感じてしまう子どもたちがいると思われそうですが、その辺のご苦労がどの程度現場であったのでしょうか。

【中先生】

横田委員のおっしゃる通りでございます。

今となっては、ジェンダーという視点で男子女子関係なく、誰も傷つくことのない事業展開が目標であります、正直難しくございます。

私も女性であり、そして主にその出産に携わっているということになると、過去のアンケートには、おそらく男子生徒だと思われそうですが、女子に偏った内容であるというふうにご指摘をいただいたこともございます。

そういったことの反省も含めまして、どのような授業内容が良いのだろうかというところは、現場にいらっしゃいます先生方と協議しながらやっているところではございます。

助産師が性教育を行うということが、日本全国各地で行われておりますが、統一された指針などがございませんので、個々の感性や価値観によるところが非常に大きいところです。

そういったところを、子どもたちの不利益にならないように、私たちが不得意としている子どもたちの発達などについては、現場の先生方が十分熟知されておりますので、ご意見をいただきながら、私たちが提供できる授業を考えております。

【横田委員】

大変難しいことであると思います。

例えば思春期の子どもたちに関して、性に関わることというのは自分の身体が変化していきますから、その辺をどう指導していくのかはすごく大切で、以前は寝た子を起こすなというような言い方をされて、そこら辺はスルーしていた。保健の授業でも、その辺をさらっと終わらせてしまっていたということも多々聞いているわけですね。

教育現場では、保健体育の中だけではなくて、例えば国語の中で生き方とか、理科で言えば、生物的な性器の実際の具体的な指導などを総合的にしていかないと、この事業はなかなか進みにくいのではないかと思います。

このデータは現場ですごく使えるとは思いますが、それを活かすか活かさないかは現場の先生方、それから管理職の先生方のリーダーシップによるのではないかと思います。非常に素晴らしいデータで感心しました。

【深井委員】

本当にすごく深い話で、今まで私もずっと富士見市にいますが、性教育とかそういう話は、林間学校の前のちょっとした時間に、男女別々という感じでやると思っているのですが、今この話を聞くと、年ごとにレベルを上げて話をしていかないと追いつかないなと思いました。

そうすると、今後の授業内容、「いのちの授業」も、今度聞きに行こうかなと思っておりますが、今後どのように行っていくのでしょうか。

【中先生】

深井委員がおっしゃる通りで、理想を掲げたものを実際にどうしていくのかというのは、正直子どもだけの力では難しいところがございます。

そのところを、富士見市と一緒に、どの程度、私たちが協力できて、どの程度子どもたちに還元していけるのかというところの折り合いをつけていけたら良いなというふうに思っております。

【渡邊先生】

戸津からも少し報告させていただきましたが、2年前の結果では、自尊感情を上げることを含めて、「いのちの授業」を行ったところ、狙い通りに自尊感情や知識も含めて生徒の力が上がっていったという結果を得ました。

今回はそれよりも多いデータを得たのですが、今回につきましては、中（講師）による自尊感情を上げるために狙った介入は行っておりません。

そうしましたところ、自尊感情は授業の前後で変わらず横ばいという結果でしたので、やはりおそらく先生たちが一番ご存知かとは思いますが、ターゲットを絞って、得て欲しいものを狙って教育を行うことがすごく大事なのかなというふうに思いましたので、おそらく、中（講師）がこれから行っていく「いのちの授業」に関しましても、漠然とパッケージで行うのではなく、生徒に得て欲しいものは何であるかというのを明確に決めた上で、それを狙った授業にしていく必要があるのではないかなというふうに思ったところです。

ですので、基本的には調査をして、ニーズをきちんと得て、何が足りていて何が足りていないのか、もっと伸ばしていきたいところはどこなのかというのを、「いのちの授業」を担当する講師と現場の先生方でよく話し合いをされて、それで必要なところをさらに伸ばし、足りてないところはもっと足していくという狙いを持った取り組みが大事なのではないかと考えております。

【小野寺委員】

私も教育大綱を作成する委員として関わったものですから、富士見市において「いのちの教育」を、一番大事なものにしていこうと思っておりまして、その後ですね、助産師の方々にお願いをして、「いのちの授業」を全ての学校で実施しているというのは聞いていたのですが、どのように授業が行われていて、その結果どうなっているのかまでは、本日まで存じ上げませんでした。

子どもたちに授業をしていただいて、さらに調査、考察をして、ここまで研究をまとめていらっしゃるというのを聞いて、大変驚いたのと同時に、とてもありがたいというふうに感じました。本当にありがとうございます。

何年か前から英語教育が始まったり、プログラミング教育が始まったり、I C

T教育、G I G Aスクールとか色々言われていて、新聞報道もそういうことが中心にされていますけれど、本当の教育の根幹というか、人の教育の根幹に関わるのは、やっぱり「いのちの授業」で、本日のような内容についてもっともっと色々なところで報道されたり、話し合いがされたりしなくてはいけないのではないかと改めて感じたところです。本当にありがとうございます。

調査結果を聞かせていただきましたが、もう少し具体的に、授業をされた後に、子どもたちにどのような行動の変容・変化があったのか、調査から推察されることでも結構ですし、学校で教員から聞かれていることでも結構ですが、具体的な変容・変化について教えていただければと思います。

【中先生】

私は授業に伺うだけですので、その後の子どもたちの生活の様子を直接見ることはできないのですが、先生方に伺うと、私が話した内容を、学校の中で教育的な機会があった時に、それを引き出しにして子どもたちと話をしているという事は伺ったことがあります。

その時に、私が話した内容などが、自分の体験を持って子どもたちが理解していく際に、養護教諭の先生を中心に、子どもたちと関わっていてくれるのだろうというふうに思っています。

ただ、調査の中では、授業の前後で自尊感情が高まったとか、横ばいというふうには出ていますが、それが顕著に私たちの目で見えるかどうかというところは、ご列席の先生の中で何かご意見が伺えれば私も聞きたいなと思っていますが、いらっしゃいますか。

【山口教育長】

中先生の授業、それから他の講師の先生の授業、いくつか直接見た時に、子どもたちが真剣に先生の話の話を聞いているのだけれども、それだけではわからなかったのですが、その後、感想文を読ませてもらった時に、いのちの重さとか、いのちの尊さとかの認識が、その表現から日頃学校の先生の立場で子どもたちに教育している中では、引き出せないだろうなという言葉、感じ方がたくさん出ています。

それを見た時に、やはり助産師さん、中先生が伝えたいことが子どもたちの中に入っていき、その授業だけではなく授業をきっかけにして、それからの学校生活の中、社会生活の中で合わさって、行動変容につながってくるのだろうと感じました。私が見て取れるのは子どもの感想文からなので、紹介させていただきました。

【深野委員】

私は自尊心について気になっていましたが、私の娘が中学生ぐらいの頃は、周りも自分を肯定するのが難しいという話をよく聞いたので、これだけ高いというのは驚きで、教育を続けていただいたおかげかなと思いました。

子どもたちが地域へ愛着を持っている意識がある割には、行事にはなかなか参加できていない。環境もあるのでしょうかけれども、もう少し何か地域からのアプローチも他にできたのかなと思いました。

先日、研修で他の市の話聞いたのですけれども、ちょっとこれは難しいかなとは思いますが、中学校で地域の方と触れ合う場があって、ご協力をいただいた、小さい赤ちゃんをお持ちのお母様何人かいらしていただいて、中学生とお話をしたり、赤ちゃんを実際に抱っこしてみるというのがありまして、お母様たちは、最初は落とされたらどうしようという心配があったみたいですが、ちゃんと言われたとおりに抱っこしている姿を見て、ちゃんと育ってくれると良いなというふうに思いましたという、ご意見があったり、中学生も最初は怖いという意識があったみたいですが、かわいいなと感じたというのがあったので、そこからでも、いのちの大切さも学べるのだなというのを感じる体験をしました。

【渡邊先生】

様々な市で、深野委員がおっしゃってくださったような新生児と触れ合うような体験を中学生や小学生にしてもらうというような取り組みがなされているというふうに伺っております。

現在の日本は、合計特殊出生率が2021年度で1.3です。これは、身近に小さな子どもを見たことがないまま成長して自分も親になるということの意味しております。

こういうことを考えると、いのちの大切さ、身近に小さい子どもを見て、いのちを育てていくことも含めて考えていくような、そうした地域の取り組みがこれからますます大事になっていくのかなというふうに思います。加えて、今の祖父母の世代ですね50代60代70代ぐらいまでの方々、この世代は合計特殊出生率が2.1ぐらいの世代の方々ですので、豊富な子育て経験があるの方々であるということを考えると、祖父母の世代、そして私たちの世代やこれからの世代を含めて小さなお子さんとの世代を超えた関わりが、これからますます重要になってくると思いますので、深野委員がおっしゃったような取り組みというのは、地域の中でも広がっていくべきものかなというふうに思います。

【星野市長】

先ほど、家族間の交流の多い少ない、の調査から、少ない方が、自尊心が高

い結果となっていたことから、あれとちょっと思いました。ずっと自分の中学生の頃を思い出していたら、家族旅行に小学校までは行ったが、中学1年生からは行ってないですね。弟とは年が離れているので、兄貴との思い出がないなんて、ずいぶん前に言われたことがあって、家族旅行に行っていない私は自尊感情が高かったのかなと今ちょっと思いをしたところですが、一方で家族との交流を否定するわけではなく、あるに越したことないということで良いでしょうか。

【渡邊先生】

星野市長のおっしゃるとおり、この結果が示すのは、家族間の交流を否定するものでは決してなくて、それはあった方が良く、ないと認識して答えたお子さんには、それなりの自尊感情が育っているということを考えると、すでに精神的な親離れが進み、親との交流が少ないと回答するということですので、実際は本当に交流が少ないかどうかはわかりません。

ご本人がそのように認識して回答したということですので、そのように認識して回答するお子さんには、もしかしたら心理的な親離れがすでに進んでおり、それが自尊感情の高さにつながっていたのではないかと考えておりますが、これは推測の範囲のため、今後調査や分析の方法を工夫して、いかなる要因でそのようになっているのかを探っていきたいと思っております。

家族の交流は今後も必要で、それがあった上で自立を促していくのが大事かなと思っております。

【山口教育長】

先ほどご紹介いただいたように、「いのちの授業」が富士見市で始まったのは、養護教諭の先生の発案で、中先生とつながり、東中学校から始まって、今全校に広がりました。「いのちの授業」は、性教育の側面と、いのちを大切にすることが主であると、私自身も市内の学校に行き理解をしていましたが、実際に授業を拝見させていただいて、人が人としてよりよく自立していくためにはどのような教育が必要なのか、大人は子どもにどう関われば良いのかということなど、色々な方向性を教えていただきました。

教育大綱を掲げた時に、いのちを大切にすることが始まりましたが、これは「いのちの授業」を、富士見市の教育の一つの核として、取り組んでいきたいということから始まっています。

いのちを大切にすることはもちろん、いのちをより良く輝かせていく、一人ひとりがその人らしく生きていくということで、先ほど全ての子どもたちに包括的セクシャリティ教育をと、今後の方向性も示していただきましたけれども、これを構築していくことが、今新たな課題として見えてきたなという、なんとなく

わかっていたものが、データを理論的に整理していただくことで、これから取り組んでいくことが少しずつ見えてきていると今感じているところです。

小学校1年生から中学校3年生まで9年間を通して、それぞれの学年で、どんな教科でどんな指導をつなぎ合わせていくのか、その中に「いのちの授業」が組み合わさり、子どもたちがより良く成長していく、結果的に自分を大切に人をも大切にするとするところ、それから、自ら学ぶ原動力になっていること、そして故郷を大事にして、周囲の人たちに自分が何か役に立てるか、できるかということを見つけていく、全部包括的につながっていると考えていますので、本日、養護教諭の先生にも来ていただいているので、お力を借りながら、これからどのように他の教科や教育活動とつなげていくか、また、それをもとに、地域の方々との活動につなげていくかというふうに、自分なりに期待感を持って、具体的な行動につなげていきたいと思ったところでございます。

【横田委員】

出産はすごく女性にとっては大変なことであり、その結果、生まれてきた子どものいのちというのは、素晴らしいものであると思います。ただ、生まれる時に、障がいを持って生まれてくる子どもたちもいるというようなことが、多分この出産という場面を切り取ると、そこだけでも非常にインパクトのある授業展開にはなるのではないかと思います。生きるということを考えた時に、逆に死ということに関しては、先生たちはどのようにお考えでしょうか。

例えば、今、ICT教育などがあり、色々なところで情報が入ってくる状況であったり、それから自死、自殺する方もいたりします。また、ちょっと離れれば戦争が起こっていると、そうすると戦争は対岸の火事だけど、身内の死ってというのは本当に大変な2人称の死と、子どもたちには死の授業といたら失礼ですけど、死ということに関してはどのようにお考えでしょうか。

【中先生】

私も医療現場に身を置いておりましたので、死に直面することも多々ありました。その度に、自分の中で考えることがありましたけれども、現在の超高齢社会になって、どのように自分が亡くなりたいのかっていうのをプランニングすることも注目されております。

死を考えた時に、どう死にたいかというのは、言い方を変えますと、どう生きたいかにつながっていくのだと思います。生と死っていうのは真逆にあるようにも感じるのですが、結局のところ自分がどう生きたいのか、どう亡くなりたいのかということを考えるということは、生を考えていくことにつながっていくというふうに考えております。

【戸津先生】

私も亡くなり方を考えるというところでは、生き方を考えるというところにつながるのではないかというのは同様の考えを持っています。

ただ気をつけなければいけないと思うのは、今の教育において、脅しのような形で死を使っははいけないと思っていますので、その点に関しては怖いから駄目なんだよ、ではなく、どうしてここが問題点なのかとか、そういうところを、私自身も小中学生と関わる際には気をつけています。

【小林学校統括監】

私は最初に中先生の「いのちの授業」を2017年に東中学校で見させていただきました。その時、保護者の方にもご参加いただきまして、子どもたちの、目つきと言いますか、やりがいをすごく感じている部分とですね、講演が終わった後の保護者の意見が、今でも心に残っておりまして、本日お話を聞いてよかったと思います。

子どもと産まれてきた時の話をしたいという話をさせていただいて、お母様方がうちもそうしたいと、家族でなかなか話す機会を失っていたので、もう1回ここで家族の絆を深めるためにも話をしていきたい、という話をされていたのがすごく印象的でして、私もその授業をみた時に、自分の息子にも見させたいなという印象が実はありました。

授業が終わった後の会話一つをとっても、中学生の子どもたちが、色々な感情を持ちながら、こう頑張ろう、親の期待があるのだなと、こういう期待を持っているのだなという話をして、盛り上がっていたのを、すごく思い出しています。

小学校でも中先生の授業を見させていただきまして、各小学校でやっていますが、先ほど教育長がおっしゃったアンケートを保護者に見せて、帰ったらお父さんお母さんにギュッとハグをしてもらいなさい、というのをやるのですけれど、今日帰ったらお母さんにしてもらいたい、あるいは、生まれた時の感情をもう1回思い出したい、というような子どもたちのアンケートを見て、非常に良いものだなと、いのちの大切さを色々な形で学校現場は教えている、指導していると思うのですが、本当にそういう意味で、また我々学校現場の教員とは違った視点で温かい、あるいは心温まるような授業をしていただけるということで感謝をしております。また、ずっと続けていけたらと思っています。

また、学校現場の方で、そういう機会をいただければ、先生方の研究を学校現場で違った形でまた活かしていけるような研究を進めていけたら良いなと思っています。

【石井学校教育課長】

先ほど教育長から9年間を見通してという話がありましたが、富士見市では小中一貫も力を入れていかなければいけない部分です。

現在、「いのちの授業」は小学校では5、6年生のどちらか、中学校では主に3年生で行っていますが、小学校1年生から中学校3年生までどうつなげていくかは、今後の、我々の研究が必要な部分だと改めて思いました。

【星野市長】

現場からの声もお聞きしました。

中先生、渡邊先生、戸津先生、本当にありがとうございます。

ご指摘、今後の課題ということで、4つのポイントを教えていただきました。

私は大変関心高く持っておりますので、市長部局、教育委員会と、今後の展開、またポイントとしてお示しいただいた所への対応などを検討してまいりたいと思っております。

調査については、小学校においても進めることを山口教育長と検討していました。そうした意味からも、本日の有意義なご報告、ご意見を拝聴させていただいて、しっかりと前へ進めさせていただきたいと思えます。

委員の皆様におかれましても、長時間参加いただきありがとうございました。本日の会議を終了します。

【齊藤政策企画課長】

事務局から1点ご報告がございます。本日の議事録署名委員に指名されております、小野寺委員、横田委員につきましては、議事録ができ次第、ご署名をいただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

以上をもちまして、令和4年度第1回総合教育会議を閉会とさせていただきます。本日はありがとうございました。